

五山文學新集

別卷二

玉村竹二編

玉村竹二編

五山文學新集

別卷二

東京大學出版會

學術書刊行基金

編者略歴

明治44年 名古屋に生る
昭和10年 東京大學文學部國史學科卒業
同 年 東京大學史料編纂所員
昭和44年 東京大學史料編纂所教授を退官
昭和48年 『五山文學新集』本巻6冊校刊により
日本學士院賞授賞

著 書

『五山文學』至文堂
『夢窓國師』平樂寺書店
『圓覺寺史』春秋社（井上禪定共著）
『如拙・周文・三阿彌』講談社（『水墨美術大系』
第6巻，松下隆章・金澤弘等共著）
『日本禪宗史論集』思文閣出版
『五山詩僧』講談社（『日本の禪語録』第8巻）

現住所 東京都杉並區上荻4丁目4番5號
杉並コーポラス303號

五山文學新集 別巻二

1981年2月28日 發行

檢 印
廢 止

© 編 者 たま むら たけ じ
玉 村 竹 二
發行者 江 村 稔

發 行 所 財團法人 東京大學出版會

113 東京都文京區本郷 東大構内 (811) 8814・振替東京 6-59964

三和印刷整版・三栄印刷・矢嶋製本

3395-86252-5149

五山文學新集

別卷二

序

『五山文學新集』全六卷は、昭和四十二年より同四十七年に到る迄、六年間に、一年に一巻宛公刊して、一應完了したが、その際已むを得ざる事情により、約三百三十五頁の組置を生じた。それに何がしかの新典籍を加へて、別巻を公刊する事になり、その別巻一を、昭和五十二年に出したが、今回別巻二を、世に公にする事となつたのである。別巻といふ以上、本巻とは何か異なる性格がなければならぬ。そこで、本巻に於ては、作者本位の態度を採り、一人一人の作者の全作品を網羅して、その人の全集にする事を勤めたが、別巻に於ては、作品本位とし、個々の作品のそれぞれの作者に、他の作品があつても、必ずしもその全部を集録しない事にした。そして別巻の各巻は、それぞれ特定の主題を標榜して、「特輯」をする事とした。随つて、同一人の作品群のうち、その主題に合はない作品集は採らないといふ方針である。別巻一では、その主題を「詩軸」に定め、「詩軸集成」と銘打つた。しかし別巻一は、前述の組置の部分がある爲に純粹に「詩軸」のみになつてゐない憾があつた。

さて別巻二に於ては、何を主題にしたかといふと、今度は宗派別の特輯で、曹洞宗宏智派わんしの人の作品を特輯する事としたのである。同派には、竺仙梵僊はんけんに随侍し、引いてはその師たる古林清茂くりんせいむに、入元の上、金陵保寧寺に參じて歸朝し、古林に就て偈頌げしゆの作法を學んだ文筆僧を輩出し、その本據たる圓覺寺白雲庵を中心として、南北朝時代に謂はゞ白雲庵友社を形成し、そこへ同派の東陵永興とうりんえいの來朝があり、東陵も曹洞宗宏智派ながら、矢張り古林の參徒であつたので、ま

たこの友社に加入して、一層鎌倉五山の文學を振興させた。それ故、本卷には、この一派の人、まづ第一に派祖東明慧日、東明の法姪たる東陵永瑱、東明の直弟不聞契聞の作品を收めた。たゞ同じく東明の直弟たる別源圓旨には、『南遊集』『東歸集』の述作あり、同派中、最も傑出した文筆僧であるが、これらの集は、既に『五山文學全集』第一卷に收められてゐるので、残念ながら、重複を避けて、割愛した。この派は、別源によつて建仁寺に移植され、同寺洞春庵及びその末寺越前弘祥寺を中心として、室町時代を通じて、相當に發展し、またこゝにも文筆僧を出した。元方正楞・驢雪鷹潮がそれである。殊に驢雪は越前の朝倉氏の歸依を受け、同氏が展開した同國一乗谷の文化活動の中心をなしてゐる。それ故、元方・驢雪兩人の集をも收載し、以て宏智派の作品の網羅に力めた。なほ東明慧日の『東明和尚語錄』、東陵永瑱の『瑨東陵日本錄』及び『關東諸老遺藁』のうち東陵の作品は、『五山文學新集』としては、「本卷」第六卷に收めた鏡堂覺圓の『鏡堂和尚語錄』に次で、收載した數少い中國僧の作品に屬する事を、一應注意を喚起して置く。

以上の理由を以て宏智派特輯を計劃したが、これのみでは紙數に充たず、一卷を形成し難いので、次に臨濟宗黃龍派作品を二種收めた。同派の作品は、既に「本卷」に於て『黃龍十世錄』（龍山德見）・『禿尾長柄帚』（禿尾鐵菴）（正宗龍統）、別卷一に於て『續翠稿』・『江西和尚語錄』・『續翠詩藁』（江西龍派）を收載したが、同派にも文筆僧が多いので、この卷には、天祥一麟の『天祥和尚錄』を收めた。天祥は龍山の弟子にして、江西はその弟子に當り、既載の龍山と江西を撃ぐ重要な人物であるが故に、こゝにその作品を收録した。また九淵龍蹊も天祥の弟子で、江西とは兄弟ひんていに當るので、之も序でに收録して、黃龍派作品の集成を完璧に近づけたのである。

それでも未だ一卷を成すに足らないので、次の部類として、上村觀光居士舊藏本を集録した。これは全く偶然にさうなつたので、本來は稀觀本を集める意圖であつたのである。その一は天章澄或の『栖碧摘藁』であり、これは私が四十

年來憧憬してゐた幻の本で、今回縁あつて、漸く全卷の内容を我が手中に収めたので、之を校刊して、本冊に加へる事とした。それは妙心寺雜華院所藏の舊上村本である。その二は心華元棟の詩集である。これも數年前、所藏者加藤正俊師の好意により、その内容全貌を我が手中に収め得たもので、今回同師の快諾を得て、本冊に加へる事になつたが、これが又上村氏舊藏本である。この二書は誠に天下の稀書であり、之を『五山文學新集』に加へ得たことは同集の價值を彌が上にも高めたと自負するものである。

それでもまだ滿冊にならないので、汝霖妙佐の四六文集『汝霖佐禪師疏』と、惟忠通恕の語錄『繫驢概』を加へ、漸く所期の紙數に達した。汝霖は春屋妙葩の法嗣で、夢憲派に屬し、文章、殊に四六文を絶海中津に受講した。絶海の門生の四六文として、既に曇仲道芳の作品集を「本卷」第一卷に収めたので、これと相並ぶ四六文の名手と謳はれた汝霖の作品をも、是非收めたく思ひ、之を本冊に加へたのである。また『繫驢概』は、その同一作者の詩文集『雲壑猿吟』が『五山文學全集』第三卷に收められてゐるので、その對となる語錄をも本冊に加へて、惟忠の作品の全璧を世に紹介し度く思つたから、敢て本冊の最末に加へて、掉尾の雄を振はしめたのである。このやうに追加に次ぐに追加を以てしたのでは、「特輯」の性格は、また薄められてしまつたが、このやうに多くの珍書を收載出たのであるから、これも已むを得ない事、否寧ろ慶賀すべき事かも知れない。

「本卷」六冊の序には繰返して申述べた事であるが、「本卷」を見ずに、直接別卷を閲覽される方々の爲に、念のため、この『五山文學新集』刊行の趣旨を披瀝して置かう。嘗て上村觀光居士によつて、明治末期から大正初期にかけて刊行された『五山文學全集』には、五山文學の主要な作品が收録され、大正初年以來、學界を益する事多大であつたが、惜むらくは、もう一步といふところで、中斷してしまつた。且つ文學作品としての價值以外に、歴史の史料としての價值

を認めるとすれば、なほ更に多くの未刊の五山文學作品があり、その中には、一流のもので、未だ一般世人の目に觸れる事なくして埋もれてゐるものも一二に止まらない。これは斯學の爲に、甚だ遺憾である。どうかして是等を公刊したいといふ趣旨から、戦前に於て、既に元東京大學史料編纂所長森末義彰氏（當時は史料編纂官であつた）が、この集の企劃を立て、その手始として、横川景三の『補庵京華集』（本新集「本卷」第一冊所收）を手がけ、原稿作成の段階まで行つたが、戦争の熾烈化によつて、その計劃は頓挫した。それを昭和四十年春、當時の史料編纂所長竹内理三氏が復活され、東京大學出版會から刊行される事になつた。その詳細な経緯は、「本卷」第一卷の序に述べて置いたから、それに譲るが、以上のやうな事情で生れたのが本集であり、名づけて『五山文學新集』といひ、一應『五山文學全集』とは別個のものとし、未刊のものを優先するとはいへ、『全集』を含めて、他の叢書所收のもの等、おしなべて、既刊のものと雖も、それよりよい本を得れば、それを底本として、本集に收録した。例へば雪村友梅の『岷峨集』、中巖圓月の『東海一瀛集』、心田清播^{せいはい}の『心田詩藁』、江西龍派の『續翠詩藁』及びこの別卷二に收めた九淵龍琛の『九淵詩藁』等がそれである。また時としては、未知の作者の珠玉篇をも、その間に交へて收載し、世に紹介しようとする事を敢て行つた。例へば在庵普在の弟子某の『雲巢集』（「本卷」第四冊所收）、一峰通玄の『海滴集』（「本卷」第五卷所收）及び本冊に收めた天章澄或の『栖碧摘藁』、心華元棟の『心華詩藁』の如きである。

次に本冊の印刷校正に就ては、従前の通り、千葉大學名譽教授田中久夫氏の絶大懇篤なる御助成をお願い、出版會の内校は同會の大江治一郎氏と元山不二子女史^{おこな}にお世話になつた。

原稿の書寫は、本冊は悉く私自身が行つた。但し昭和四十八年より、昨年五十五年迄、八年間をかけて、體力に應じて、徐々に書寫したので、「本卷」刊行當時のやうに、心身を擦り減らす事はなかつた。但し四十八年といふのは、『關

東諸老遺藁』と『興東陵日本録』のみで、他は別巻一の刊行された昭和五十二年以後の事であり、それならば五年間の書寫といふ事になる。

更に本文採訪撮影に就ては、『關東諸老遺藁』は、私の筆記を底本とした爲、『繫驢轍』と『興東陵日本録』は史料編纂所架藏本より、新田英治・山口隼正兩氏の好意による複寫コピーによつたものを用ひて原稿作成をした爲、撮影は不用であつたし、『九淵遺藁』は國立公文書館に向いて、内閣文庫本を筆寫して來たものより原稿を作成したので、これも撮影を用ひなかつた。また『心華詩藁』は焼付を加藤正俊氏より贈られたので、これも新たに撮影の要はなかつた。また『東明和尚語錄』は鎌倉國寶館の安田三郎氏に依頼して撮寫し、その他は悉く京都の清水光藝社清水實氏に依頼して撮影していただいたものを用ひた。右の諸氏に篤く御禮を申上げる。

最後に底本の閲覧撮影及び底本として用ひる事を許された圓覺寺白雲庵前住持故礪谷惠秀師及び現住持礪谷惠杲師、建仁寺兩足院主伊藤東愼師、妙心寺雜華院主澁谷厚保師、同師を紹介して下さつた元東京國立博物館勤務の竹内尙次氏、天龍寺金剛院主加藤正俊師、東京大學史料編纂所の稻垣泰彦氏・菊地勇次郎氏の歴代所長、國立公文書館内閣文庫・松ヶ岡文庫・鎌倉國寶館長貫達人氏、及び史料編纂所の今枝愛眞・新田英治・山口隼正・今泉淑夫の諸氏、及び瀧田英二・安良岡康作・中川徳之助の諸氏、また駒澤大學の葉貫磨哉氏には、有形無形の助言・激勵・閲覧の便宜・底本としての使用許可の取計ひを賜はつた。茲に更めて深甚の謝意を表する次第である。

終に、この出版に際しては、東京大學出版會の石井和夫・中平千三郎・成田良輔・齋藤至弘・大江治一郎の諸氏に、一方ならずお世話になり、御厄介をかけた。

なほ、この出版は、文部省昭和五十五年度科學研究費補助金（研究成果刊行費）の交付を受けて成就したものである。

永年に亘つて、引續いての給付を感謝する。

昭和五十六年一月十五日、於信陽傲居壽雲洞、

凡 例

一、五山文學新集は、鎌倉時代より江戸時代に亘る日本五山禪林の漢文學作品を、校訂刊行するものである。その作者が宋・元・明の來朝僧であらうと、日本僧であらうとを問はず、また一部の詩文集のうちに包含される法語・語錄的な部分をも削除せずに収載するのを基本方針とする。

一、本集の「本卷」は六卷六冊を以て、一應完結したが、なほ収録すべき作品が多數あるので、別卷として、之を續刊することとした。本卷はその第二冊であり、「別卷二」と稱する。

一、別卷といふ以上、「本卷」と多少編纂方針を異にする。即ち各卷の大半を、特輯にすることにした。差當り、別卷一には、後半に「詩軸集成」を編輯して、之を加へた。その前半には、「本卷」第六卷に收めるべきもので、頁數超過のために「組置き」とした江西龍派の作品、それに續いて乾峰士曇・心田清播の作品を收めたので、未だ本卷の性格を繼承殘有してゐる。しかし別卷二に於ては、その前半に於て、曹洞宗宏智派の作品を特輯し、後半には、本卷に洩れた作品を、任意に取上げたが、本卷に於ては、各個人の家集を全集の形で網羅する方針であつたが、この冊に於ては、作品集を中心とし、個人の作品の網羅を意圖しないことにした。よつて、臨濟宗黃龍派の天祥一麟・九淵龍蹊、同夢窓派の天章澄叟・汝霖妙佐、同大覺派の心華元棧、同佛源派の惟忠通恕のそれ／＼一作品集を收め、惟忠や心華には他の作品集があるが、それには顧慮を拂はない事にした。

一、卷末に各集の解題を纏めて附した。その解題は作者の傳記、底本及び校訂本として用ひた諸本の解説、作者關係宗派圖を含む。

一、詩文の題は四字下りに一定し、七言絶句の場合、底本に於て、詩題が詩の後の餘白に記されてゐることがあるが、校刊に際しては、それらを悉く詩の前に移し、四字下りにして示した。

一、底本の讀點にとらはれず、新たに讀點と並列點とを施し、底本の返點・送假名(殆どないが)は省略した。但し振假名は、解讀に便益ありと認めた場合にのみ、これを殘置した。

一、底本の字傍の朱點・朱圈・朱線は、原則として頭書に註した。

一、底本の朱引は省略した。

一、用字は、なるべく底本通りにするやうにとめた。但し前項に觸れたやうに、底本の新古にしたがひ、多少緩急の差をつけた。左の括弧内に示す文字は、各本に共通して、括弧外の字體に統一した。また誤字訂正の傍註の場合、その誤謬の由つて來る理由を示すに必要と思つたときは、括弧内の字を故意に註したこともある。

圓(円を用ひず)

與(与)

圀(圈)

離(离)

學(学 幸)

劉(刘)

對(对)

關(関)

數(数)

聲(声 声)

覓(觅)

含(含)

來(来 来)

盡(尽)

圖(图)

乘(乘)

昂(昂)

隻(双)

舊(旧)

舉(举 幸 幸)

實(実)

璵(瑀)

嶼(屿)

點(点)

籬(篱)

桑(桑)

獨(独)

答(荅)

獸(獣)

處(処 處)

還(还 迅) 流(汨) 壓(壓 庄) 佛(仏) 拂(払)
 燈(灯) 亂(乱) 屬(属) 囑(嘱) 邊(辺)
 廬(戸) 爐(炉) 爲(為) 所(所) 回(回 回)
 几(凡) 壑(壑) 擇(択) 澤(沢) 釋(釈 尺)
 國(国) 前(前) 勢(勢) 要(要) 蘆(芦)
 函(函) 涵(涵) 祇(祇 「たゞ」「つゝしむ」の場合) 龍(竜)
 龜(亀) 嘗(嘗) 號(号) 萬(万) 寶(宝 寶)
 濱(濱 浜) 賓(賓) 壹(壹) 會(会) 即(即)
 你(爾 你) 尔(尔) 譽(譽 訃) 藝(芸) 龜(亀)
 虎(虎) 聽(聽) 禪(禪) 靈(灵)

一、同一文字にして二體以上を併用した主要なものは左の通りである。いづれも底本のそれぞれの箇所の用字に従つたもので、同一底本でも、箇所によつてまち／＼の字體を用ひてゐることは勿論である。

館 館	役 役	秋 妖 穉	栖 棲	總 総
侍 仕	時 眈 眈	詩 詠	紙 帑	節 節
船 舩	算 算	答 奮 (答は用ひず)		柏 栢
遷 迂	得 得	聞 聾	虛 虚	鼎 鼎
歸 帰 皈	叢 叢 叢	蓋 盖	筆 筆 筆	等 等 才

凡 例

蘇 蕚

書 唇

徒 徒

草 艸

年 季

聰 聰

事 夏

鬢 鬢

條 條

寶 瑤 (宝寶は用ひず)

後 后

洲 湯

州 刳

國 園 (国は用ひず)

淵 洳 困

養 狼 (養は用ひず)

也 芑

花 芑 華

稿 藁 稟

邇 迓

爾 尔 (尔は用ひず)

稱 稱

雪 霽 (雪は用ひず)

陽 易

裏 裡

腸 腸

賢 賢

野 埜

臺 臺 台

宜 宜

誼 誼

圖 畺 畺 (畺は用ひず)

峰 峯 壘

岸 岾

崖 岬

海 嵒

溪 谿

篇 篇

梅 榑 毒 罽

潛 潛

會 岑 (会は用ひず)

村 邨

窓 憲 窗 囪

叟 叟 交

床 牀

嶽 岳

幹 幹

以 目

似 侶

富 富

啣 啣 銜

天 莧

春 菑 昏

辭 辭

道 衍

貌 貌 貞

修 脩 修

須 湏

韻 韻 勻

松 窠 忝

嶺 嶺

妙 妙

群 羣

香 薌

嗣 嗣

體 体 躰

獨 歎

無 无

堂 坐

島 嶋

仙 僊

風 凰

衆 众

裏 裏

珍 玼 (玼は用ひず)

笑 咲

巖 岩 崑 崑

雁 鴈

雲 皇 嚴 ム 闇 嘗 居 屈 洛 維
塔 壇

一、躍り字は殆ど「こ」を用いた。但し木版本を底本にした場合、または江戸時代の寫本を底本にした場合は「々」を用いたこともある。

一、底本の文字の誤謬を正すために、これを換へる文字それ自體、またはその文字を含む校訂註は「」を以て、その他の校訂註《(マ、)》(衍力)《(脱アルカ)》等《及び説明註《固有名詞の傍註を含む》は()を以て括つた。

一、校訂者の私見による異同註は、相當確實に正鵠を得たと思はれるものでも、他本との異同註と識別するために、その註に「カ」を附して、私見なることを表現した。

一、底本の文字を書くべして書かなかつた空白は、その状態を存して(マ、)と傍註した。また蠹損汚損等によつて不明となつた文字には、その字數に應じて□□または□□□、墨抹には■の符號を本行中に入れた。

一、底本に抹消あるときは、それが如何なる方式に據つてゐようと、校刊にあたつては、左傍に「こ」を施す方式に統一した。而して抹消した文字も本行中に示した。

一、底本の文字に、字畫上の疑問はなく讀み得ても、文意が通じかねる場合には、その部分に(マ、)を傍註した。

一、底本に於て、傍に補書したものは、その位置において、傍書のまゝ示し、その脱落を挿入すべき箇所を、底本が「○」を以て示してゐる場合は、その通りの傍書のまゝに組み、行の中央に「○」印を挿入し、若し底本が、その挿入すべき箇所を示さない場合は、校訂者が私意を以て、その補入すべき箇所の行の中央に「△」印を附した。校訂の結果、底本の脱落を他本を以て補ふ場合、補ふべき文字を「」に括り、挿入せらるべき箇所に、同様に「△」を附

した。また底本に脱落があり、しかも脱落した文字の不明である場合は、(脱アルカ)と傍註し、若し脱落の箇所が歴然たる場合は、矢張り同じく「△」印を行の中央に附した。これがないときは、その句のどの箇所に脱字があるか、確認出来ないものと承知していたゞきたい。また長大な補入に限つては、その部分を「」又は『』に括つて、本文中に挿入し、竝頭欄にその旨を註記した場合もある。

一、底本に於て、文字の順序が顛倒してゐるとき、「○乙」の符號を附して、これを正すべきを示してある場合には、その符號に従つて、これを正しい順序に改めた。

一、闕字等による底本の字あきの箇所が、行末・行頭に來た場合は、闕字か平出か、行頭の一字下りか、區別が出来ないのを慮つて、このやうな場合に限り、行間に「○行末」「○行頭」「○平出」等と註した。

一、底本に類題のないとき、他本にこれがある場合は、その本の表現に従ひ、『』に括つて類題を設けた場合がある。また他本にもないときにも、どうしても必要と思はれる箇所には、私意を以て類題を設けた。この場合は「」を以て括つた。

一、人名・地名・寺院名・書名・年號等の傍註は、概ね各作品毎に、更めて繰返し註した。本書の如きは、通讀されるよりも、必要な作品のみを適宜摘出して讀まれることの方が多いと判斷したから、煩をいとはず、細かく傍註した次第である。

一、日本禪僧及び中國の教・律・禪僧、並びに日本に於て南宋・元・明の影響を強くうけた禪宗以外の宗派の僧侶(例へば北京律の泉涌寺一派、天台宗または淨土宗ともいふべき廬山寺・三鈷寺の派等)の名號は、道號と法諱と四字連稱するのが正儀である。よつて道號が本文に出たときは、法諱を註し、法諱が二字完全に出たときは、道號を註し、法諱の下